

安全と安心のために 東日本大震災から一年

3・11の大震災から一年
あの日あの時の
取り組みを
振り返ります

横浜

「なんだこの揺れは…!?!。これは大変なことになるぞ」と横浜に拠点を置くN&O事業本部の全員が思った。事務フロア内は備品の倒壊こそなかったものの、エレベータは停止し、横浜ビル高層棟12階のメンバ―は、揺れが収まるまで動くこともできなかった。全員が作業を中断し、揺れが収まると同時にリーダーの号令のもと、手分けをしてサーバーームの確認に走った。

それは、週末のいつもと変わらない日常に突然起こった。宮城県沖を震源とする日本で最大の地震だった。まもなく横浜ビルのサーバーームに異常がないことは確認できたが、皆の頭の中には「横浜ビルがこれだけの揺れだったら、ネットワークはどうなっているのか?」という懸念が脳裏をよぎっていた。

だった。NCCに駆けつけたN&O事業本部の担当者40名近くが鳴り続ける監視端末のアラーム音の中で、異常を示す赤いアイコンで覆い尽くされている画面と格闘し続けた。N&O事業本部の総力を結集した長い闘いが始まった。



横浜ビル NCC 15時10分ホワイトボードの前に

仙台

ちょうど同じ頃、震源に一番近い仙台センター(泉区)では、ビルから避難し、当日の出勤者全員の無事を確認していた。揺れは激しく、キャビネットの倒壊、壁の剥落も見受けられた。ライフラインはすべて寸断され、本社とも連絡がとれない。その後も、震度5前後の余震が続いていた。お客さま先で作業する社員を含めた在籍者全員の安否確認に取り掛かるが、携帯電話のバッテリー切れ、そして寒さと空腹が社員を容赦なく襲う。



仙台センター 対策本部



仙台センター 事務スペース(ほとんどのキャビネットは倒れた)

誰の指示でもなく、ネットワークやサーバーの担当者がNCC(Network Control Center)へと向かった。NCCは、インテックが提供している全国のネットワーク系サービスを、24時間365日監視しているフロアであり、各拠点の稼働状況が一覧できるようになっている。

地震発生から15分後、N&O事業本部の「臨時対策本部」をNCCに設置したが、最初に行ったことは、ビル内のホワイトボードをかき集めることであった。即座に役割を分担(ネットワークの稼働を確認する部隊・サーバーの稼働を確認する部隊・通信キャリアに確認をする部隊・電力会社に確認をする部隊・社内からの電話に対応する部隊)し、情報収集と確認を開始し、次々とホワイトボードに書き込んでいった。

余震も続き、大津波警報が発令されている。何がどうなっているのか把握することそのものが困難な状況

東京

東京本社では、地震直後、消防からの指導もあり、本社ビル前庭に全社員が避難した。避難指示が解除されてオフィスに戻り、至急、災害対策本部を設置し、社員の安否確認と同時に、お客さまシステムの稼働確認体制の確保を行った。報道により、震災だけでなく津波の被害が徐々に明らかになり、あまりの被害の大きさに言葉を失う中、確認作業は延々と続いた。一部の関係部門以外については、早期帰宅の指示が出され、週末を会社で迎えることになった。

システム復旧に向けて

あたりが暗くなってきたもNCCでは状況確認が続いていた。東北方面の監視対象となっている拠点のアラームは減らない。稼働確認ができない拠点は未だに100拠点を超えている。

「本日の首都圏の鉄道の復旧は見込めない」と報道されている。近くのコンビニには食料は既になく、備蓄の非常食をすべて配給した。

交代要員の出勤も確認すらままならず、電力会社や通信キャリアからの回答も、見通しについての明言はない。

N&O事業本部の災害対策本部として、余震などの不測の事態に備えて週明けまで延べ35名からなる24時間体制をスタートさせた。

NCCでは、3月12日(日)付が変わろうとする頃になつても、東京電力管内で300万世帯の停電が継続しているため、未だにアラーム音が鳴りやまない。

横浜ビル前の国道15号は都心から徒歩で帰宅する

エピソード

仙台センターの裏マシジョン

本震発生直後、仙台センター裏のマシジョンベランダから「助けて!」と叫ぶ女性の声。ご主人は出張中、生後3か月の赤ちゃんを抱えて身動きができない。早速、部屋まで伺い、仙台センターの避難所としている会議室へお連れした。その晩は、停電の中、ローソクの灯りで社員と過ごしていただいた。時には、社員が赤ちゃんをあやすこともあった。

SE魂

お客さまシステムの本稼働を4月に控えた、担当のSEは、仙台センターから高速で約1時間半かかるお客さまのところへ、歩いて向かった。彼の家は、お客さまと仙台センターの中間。歩く途中で、自転車を購入し、2時間半で到着。マシン室で、いつものように平然と作業を続けた。「大震災であろうと、プロジェクトを任されているインテック社員が誰もいないのは、お客さまに対して示しがつかない」と。

部長いつ来るんですか?

当日、アット東京でお客さまの視察が予定されていた。事前の打ち合わせ中に、地震発生。お客さま自身も揺れは感じられたようだが、「しばらく交通網はストップ。たいした揺れでもないし、アット東京にいるのが一番安全」と判断、打ち合わせを続行。そのころ部長は、当然、視察は中止と思い、つながりにくい電話で安否を確認。やっとながった部下に「無事か?」の第一声。部下は開口一番「部長、いつ来るんですか。お客さまが、ずっとお待ちです!」視察どころではないほど、大混乱していることをお客さまと部下に伝え、状況を理解していただいた。



20kg、水100本、カップ麺や野菜調味料やレトルトカレー、食器、懐中電灯、電池、毛布を降ろした。このあと20日間にわたる支援の始まりであった。新潟での調達に困難な物資は、首都圏、北陸、関西、山口など全国の部所から続々と送ってもらい、車輛延べ21台で、白米300kg、燃料130ℓ、食糧、薬品、寝具、事務用品、汎用紙など、生きるための物資や、お客さまの業務のための物資を運び続けた。

納期は絶対

仙台センターでは、お客さまへのデータ入力納期が迫っている仕事があった。余震が続く中、またロッカー等が散乱する部屋で、データ入力業務が再開された。震災による中断があったため、納期が遅れるかもしれない。震災を理由に遅延は許されないと考え、ウィズインテックへ応援を要請した。その結果、新潟、富山、横浜から計8名の応援が得られた。8名は社内会議室に宿泊し、グループで結集して対応することにより、無事に納品することができた。

新たなあゆみ

そして4月中旬、桜も散ったころ、インテックは全社を挙げて“次の対策”にシフトしていた。それは、バーチャルデータセンター構想である。インテックは、国内の主要拠点に堅牢なデータセンターを保有している。データセンター自体は堅牢な造りで災害にも強く、またセキュリティ面も万全で懸念する点は無いが、この震災を受けバーチャルデータセンター構築に拍車がかかった。「災害に強いデータセンター」それは「主要拠点をネットワークでつなぎ、各拠点でデータを保管することや、監視・運用業務を複数の拠点で実行できるデータセンターネットワーク」である。

データセンターネットワークが実現することにより、お客さまは、個別に通信回線を持つ必要がなくなる。また、マシン運用だけでなく事務運用までもサービス化できれば、事業継続にとつて極めて有効になる。

社会インフラとなった情報システムを提供する事業者としてインテックは、お客さまに安全と安心を提供し続ける。

人々の波が途切れずに続いている。長期戦に備え、予備機器の在庫確認・要員の出社可否、そして「使うかどうかわからないが」ガソリンを満タンにしたレンタカーの予約(2週間)などを始めた。

翌3月13日、NCCでの確認は続いていたが90拠点近くの稼働確認が取れていない。

そんな中、計画停電実施が報道されたが、計画停電のグループ分けはいつまでたっても発表されない。N&O事業本部の災害対策本部は計画停電の報道発表を受け、即座に14日からの体制を決定し、翌日から開始されるであろう計画停電に備え始めていた。

20時に東京電力から計画停電のグループ分けがやると発表され、14日の早朝には、東京電力管内の「計画停電グループ別住所一覧」や「対応・確認手順」をNCCに配備し、大量に発生すると懸念されるネットワークアラームに備えた。

全社と仙台が...

物資輸送で一体に



戸澤 則道 (当時 新潟センター所長)

地震発生直後、テレビから流れる映像に驚愕した。7年前から立て続けに発生した新潟での地震被害とは明らかに違う大津波に、私の出身地の釜石が、東北が襲われている。学校では地震=津波と教えられ、海岸のいたる所に大きな防波堤が、特に釜石には世界最大の湾口防波堤がある。それらを無かったことのように津波が襲ってきた。悲鳴が聞こえるようで、とにかく逃げて欲しいと祈っていた。

自分ができることは何か、そのような気持ちでいた13日の早朝、仙台センターの大滝所長から電話が入った。「出張で東京に居て、仙台に戻れない。上越新幹線で新潟に向かう。仙台に行きたい。」その声を聴いて自分の心にスイッチが入った。これが20日間の支援活動の始まりだった。手分けして支援物資を調達し、支援第一陣に途中の情報収集も托して送り出した。以降、救済車からの情報は活動の計画に非常に役立った。その後の物資調達では「米が無い」との連絡に「まさか新潟で」と驚き、給油不可能、道路の凍結に阻まれながら、それでも新潟が恩返しをするという社員の熱い気持ちがあった。仙台とのメールの開通後は、余計な負担を掛けないように、連絡が来るのを待った。救援物資はあれこれ考えずに仙台からの要望品目を調達した。富山・東京・大阪・横浜そして山口など各部所からも新潟に届いた。ただ、リストにない果物を搬送途中で仕入れたとき「美味しかった」と言われ、我慢しないで欲しいと思った。盛田副社長が激励に訪れたときに和菓子を持参した。菓子を食べる余裕が無いと勝手に思っていた。調達した菓子店の社長から「役に立って良かった」とお礼の電話があった。

13日から30日まで、11隊、延べ21台の車輛と27人の搬送隊員、新潟140人、ウィズインテック8人の応援隊、東京の救援隊本部、そして仙台の皆さんが一本のルートで繋がった20日間であった。

このような事が二度と起こって欲しくないが、ただ、備えは怠ってはならないと思う。

新潟

新潟センターは緊急物資の調達に走った。新潟でも食料品・乾電池・カセットコンロなどの調達が難しくなったが、どうにか調達した物資を緊急輸送車両に積み込み、仙台センターを目指して出発したのは、13日の昼。高速道路は使えない。雪、渋滞、ガソリン不足への不安。燃費の良い車は？通行可能なルートはどこだ？必要な物資は何か？現地の状況が判らないなかで、とにかく動いて情報を集めながら今後の支援に役立てようと走った。山形県に入って啞然とした。ガソリンを給油できない。新潟に帰れるか不安を抱えながら進んだ。仙台センターに到着したのは、20時。運んだ白米

皆、固唾を飲んで計画停電実施の、その時“に対峙した。